

野の仏さまにおききしました

2023.3.27 (月) NO11

さくら満開のころ、野にでて思う



何かを始めるのに「遅すぎることはない」

人生の目標が定まらない。若い人などはとくに、そう感じることもあるのでしょう。でもあせることはない。いろいろとやってみたらいいのです。道元禅師はこんな歌を残しています。

「水鳥の行くも帰るも跡絶えて、されども路は忘れざりけり」

水面を行く水鳥は、あちこちへと泳いでいき、その跡はさざ波にかき消されてわからない。しかし、勝手気ままに泳いでいるようでいて、ちゃんと外敵への警戒も怠ることはなく、自分の本文を忘れずに泳ぎ続けている、という意味です。人生に紆余曲折はつきものです。ときには道を変えたり寄り道をしたって、ちっともかまわない。

また、いい年なのだからそろそろこうしなければ、とか、こんなことがしたいけれど、もうこんな年齢になってしまったし・・・ということもありません。

そんなことにとらわれずに、その時々やりたいことを一生懸命にやればいい。

そのさなかにきつと、自分の本文(本当の姿)があらわれているのです。



星田山手線沿い、この風景も失われた

「寄り道したってかまわい」と野の仏さまがおっしゃった。

いよいよ「風はのどかに暖かく 花ほころんで 春の気配」・・・

満開の桜には、まったく目をやらず、酒ばかりやたらに飲んで、盛り上がっていた。(誰だ? だれだ? ダレダ? 名を名のれ)

主人公は、花であるはずなのに、いつの間にか酒になったわい。えらいこっちゃ、どんならん。

毎年、同じように美しく咲き、しかし、あっという間に散る。

良寛(1758-1831)さんが重病になったとき、何か心残りはないかと聞かれ、「死にたくない」と答えました。「辞世は?」と聞かれると

「散るさくら、残るさくらも、散るさくら」と答えています。

=了=